

南無阿弥陀仏は  
私のいのち



平成 25 年  
8 月号

NO.  
427

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19  
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺  
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796  
<http://saitokuji.tobihiro.jp/>  
発行人 岸本 秀一  
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



## 人材に人財を開く

最近、人材派遣や人材育成という言葉をよく耳にする。「人材とは、才能があり役に立つ人物。社会貢献する個人。」とあった、その人材の育成こそ教育の使命だそうだ。

社会貢献がいかなるものか一概には言えないが、「役立つ」という言葉が気に掛かる。私は「利用価値」という言葉が思い浮かぶと同時に、なにか人が物のようになってないかと感じるのである。

「あいつは使えない奴だ」「彼は使える人間だ」などと、自分の都合や状況次第で平気で遣っている。またそのような価値観は自分自身に対しても向けられる。これは現代に限ったことではないかもしれないが、最近特に顕著になっていないだろうか。

この問題は関係の崩壊である。親子の関係や先生と生徒の関係にまで使える・使えないの利用価値が入り込んでいると思う。私達の事実は関係を生きているのにも関わらず、気が付かぬうちに利用価値の有無に眼が汚されている。

阿弥陀仏は天眼を私達に手渡すと誓われている。人を物のように見、自分すらも物になり果てている有様に、眼を覚ませという呼びかけである。そして互いにその事実に目覚め、共に歩む人として出遇ってほしいという願いである。

それこそが、人が物(材)ではなく、<sup>人から</sup>財としての関係を開いてくるのではないだろうか。

# あなたの声を聞かせてください!

「えこお」では聞法会や本誌に対して、皆様のご意見・ご感想などを募集しています。

申込みの際は、原稿用紙 2 枚 (800 字) までで住所・氏名をお書き添えのもと、

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19 西徳寺「えこお」編集係

までお送りください。採用された方には「えこお」に掲載し、粗品を差し上げます。

## 「でかけていく聞法会 30 周年に向けて」 評議員会総会 開かれる

去る6月23日(日)、午後3時より西徳寺本堂におきまして「平成25年度西徳寺評議員会総会」が開催されました。来賓として責任役員の酒井眞一様・今井正之様、総代の土肥一夫様・青柳庄一様をお招きし、評議員27名参加のもと行われました。

竹内乾一郎会長、岸本住職、責任役員の今井正之様からそれぞれご挨拶をいただき、来年に迎える「出かけていく聞法会 30 周年記念事業」に向けての願いが述べられました。

竹内会長の議長のもと議案審議が進められ、すべての議案が無事に承認されました。また今井責任役員からは西徳寺の会計決算報告がなされ、みなさまにご理解をいただくことができました。

総会終了後、2階「せんだん梅檀の間」に場所を移し懇親会を開き、みなさま和気藹々と親睦を深められ、大変賑やかなひとときをお過ごしいただきました。(木村 専正 記)



## アンケートにご協力、ありがとうございました。

7月13日(土)～16日(火)の4日間、西徳寺へお墓参りされる方にアンケートを実施しましたところ、総勢 890 名の方にご協力をいただき、様々なご意見を頂戴いたしました。この度の貴重なご意見は今後の聞法活動に反映させていただきます。尚、分析結果は「えこお」にて発表させていただきます。

また、調査するにあたり、約 40 名の方々にご協力をいただきました。猛暑の中、長時間にわたってお手伝いくださり、大変なご負担をおかけしました。あらためて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。(主任 木村 記)

## なんで? 「仏花」

仏花とは、仏壇や墓参りのときに供える花のことです。供える花に決まりはありません。菊が飾られることが多いですが、刺がなく長持ちするからと言われています。

それでは、なぜ花をお供えるのでしょうか。お釈迦様が生まれたインドでは、もともと華鬘けまんという生花の輪を装飾品にした文化がありました。恐らくこうした生花を用いた文化が、仏様の慈悲を表すようになっていったと考えられています。

仏教がインドから中国に伝わり、と、現在のように花を花瓶に飾るようになり、そのまま日本に伝わりました。インドで仏様の慈悲を表す習慣が、今も私たちに受け継がれているのです。

(高橋 淳記)

電車の中で、通路を走りまわっている幼児がいた。揺れたはずみで、ひじかけで頭を打ち大声で泣いた。お母さんが、「ここで打つたの。よしよし、ペンしてあげる」といつて、ひじあてを二、三度軽くたたいたら、幼児はすぐ泣きやんだ。くつろげるように取り付けられたひじあては、いい迷惑であろう。ものごとを正しく見ず、都合の悪いことは他のせいにして、自分を是としていくような邪見になったのは、いつの頃からであろう。わたしたちは、日頃社会や他人について、多少の誤解はあっても、ほぼ正しく見ていると思っています。しかし、見る眼がわたしの主観にもとづく限り、必ず何らかの色メガネをかけて見ているのではないだろうか。だから、親鸞聖人は、弥陀仏の本願にふれて「煩惱具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし。濁悪邪見のゆえなり。『尊号真像銘文』」と、正直に自分を見つめ、そのあり方に決着をつけられます。

うぬぼれがあります。親鸞聖人は、「さるべき業縁（ごうえん）のもよおせば、いかなるふるまいもすべし（『歎異抄』）」といわれます。わたしたちは、このつまみかくしのない生きざまに目をつむ

のを作るといい、その子を育てるのに楽しんで育てようとしてきた者に、まことの心があるといえるのでしょうか。道徳が守れると思うところに、すでに自分は善人でありうるという、



## 正信偈の話 ②4

松井憲一

みだぶつほんがんねんぶつ じゃけんぎょうまんあくしゅじょう しんぎょうじゅじんになん なんちゅうしなんむかし  
弥陀仏本願念仏 邪見憍慢悪衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯  
（弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生、信樂を受持すること甚だ以て難し。  
難の中の難きこと、斯に過ぎたるは無し。）

と呼びかけるのです。悪衆生とは、阿弥陀仏の眼に写った、しどろく自己肯定する人間の別名です。だから、中国の曇鸞大師が「それ非常の言は常人の耳に入らず」といわれるよう

つて、いつまで自己を善とし他を悪とする、悪人さがし善人ごっこを続けていくのでしょうか。知識を持てば持った知識に執着し、道徳を実行すればできるという誇りがついて回る。こうして知識と道徳に執られて、ますます迷いを深めて自分を見失っていくものを「悪衆生」といいます。弥陀仏の本願は、わずかな聞法で教えを理解しようとし、善い行いで救われようとするわたしに、「汝こそ邪見憍慢の悪衆生ではないか」と、そのごかしさを捨てよ、頑張るその手を離せ、

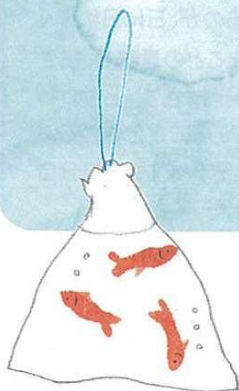
に、常識に閉じこもっている悪衆生には、弥陀の本願は容易に響かないのです。それで、この悪衆生について「信樂を受持すること甚だ以て難し。難の中の難きこと、斯に過ぎたるは無し。」といわれます。ここで難の中の難といわれるのは、教えが難かしいとか、信ずることができないというのではありません。わたしが信ずることができると思っている罪、その懺悔（げ）すらないことを、告発（こくはつ）しているのです。それで、悪衆生のわたしであるという気づきも、いただいたものであったと、うなずくことが難かしいといわれるのです。こうして、「弥陀仏の本願念仏」は、人間の闇（やみ）・はからいを破つて、つねに南無の初（はつ）一念に立たしめます。弥陀仏の本願にふれて、わたしが悪衆生であったと目覚めてみれば、その出（で）遇（あ）いの感動は、千歳一遇（せんざいいつぐ）です。親鸞聖人が「遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。（『教行信証』）」といわれるように、弥陀仏の本願念仏は、難信（なんしん）とまで示して悪衆生を救わんとする獲信（えくしん）の今のはげましであったのです。

# 山門の言葉

じゃけんきょうまん

## 邪見憍慢の悪衆生

(正信偈)



源をオフにするか、使用を控えてください」というアナウンスは、電車に乗ったことのある人なら一度は聞いたことがあるはずだ。

この言葉は、親鸞聖人がご製作された『正信偈』の一句である。自分の考えが正しいと信じ（邪見）、その考えに依って生活している（憍慢）我々のすがたを言い表している。では、邪見憍慢のすがたとは、具体的にどのようなあり方なのだろうか。

先日、電車に乗っていると、小さな子供を連れた母子が席に座っていた。子供はじつと座っていることができず、大きな声を出したり動きまわったりしていた。

当然のごとく、母親はその子供に向かって「静かにしなさい、じつとしていなさい」と注意した。そして子供が静かになると、母親は携帯を取り出し、慣れた手つきで操作し始めた。私はとくに気にすることもなかったが、実はそこは「優先席」だったのだ。「優先席付近では、携帯電話の電源をオフにするか、使用を控えてください」というアナウンスは、電車に乗ったことのある人なら一度は聞いたことがあるはずだ。

子供が周りに迷惑をかけていると思いい注意をした母親。しかしその注意をした母親も、実は周りに迷惑をかけていたのだ。

私たちは日常生活の上で、周りに迷惑をかけて生活しているとは自覚していない。むしろ自分は迷惑をかけていない、自分は間違っていないと思っ生活しているのではないだろうか。

他と比較し、自分にとっての損得ばかりを気にして生きている。そして自分にとって得にならないことに對しては非常に無関心、無責任である。

実際に、私はその母親の行為を注意しなかった。なぜなら、注意しても、自分にとって何の得にもならないと判断したからだ。また周りの目も気になったからだ。

これは自分で治そうと思ってなかなか治るものではない。それこそ生まれついて今日まで身につけてしまった事実なのである。邪見憍慢とは、仏によつて照らし出された私の本当のすがたであった。

(蓮井 邦宗 記)

## おつとめ

### 仏説阿弥陀經①

『仏説阿弥陀經』は浄土三部經の中にあつて、誰からも問われることなく、釈尊自らが進んで説かれた經典だと伝えられています。

この經典は釈尊が入滅間際に説かれたものといわれ、対告衆（お説きになる相手）は仏弟子の中でも智慧第一といわれた舍利弗尊者であります。本願念仏の仏法こそが一切の衆生を救う真実の教えであり、愚かな者であれ賢者であれ、身分や能力を問わず、肯かすにはおれない法であります。この教えを間違ひなく後世に伝えて欲しいという、無問自説というところに釈尊の切なる願いが表されているのです。

釈尊は舍利弗に三十六回も呼びかけておられますが、舍利弗は一言も発していません。それは釈尊の教えが深く身に響き、聞かすにはおれなかったのです。

(木村 專正 記)

## “秋のお彼岸をお迎えして” 「秋季永代経法要のご案内」

「彼岸」といえば「墓参り」。本当にそれでいいのでしょうか。「彼岸」は正しくは「到彼岸」といい、「彼の岸に到る」とは、頂いた人生をまっとうしていくことであります。秋彼岸を過ぎると、陽の落ちるのが、日に日に早くなります。「日暮れて、道遠し」とは、人生終りに近づきつつあるのに、未だ生まれて来たことの意味を、生きていくことの喜びを見出せない有様を教えてください。同じく「**百里を行く者は、九十を半ばとす**」ともいわれ、人生百年とするなら、九十歳は折り返しのようなもので、最後の十年が大変な難関であることを教えてください。彼岸は頂きたいのち、この私の人生と向き合う大切な一週間です。この機会に、亡き人を訪ね、自分自身を訪ねてみてはいかがでしょうか。

- 日 時 平成25年9月22日(日) 午後1時30分から
- 場 所 西徳寺 本堂
- 法 話 岸本住職 仲井真裕(法務員)

## 日 誌

- 6月15日 定例聞法会
- 6月16日 城北ブロック会総会・聞法会  
(川口リリア 参加者22名)
- 6月18日 教区研修会・坊守会(品川・照明寺)
- 6月19日 婦人会聞法会 本山リーフレットに聞く  
「ブタとイノシシ」
- 6月21日 企画委員会
- 6月22日 混声合唱団「エコー」練習  
同行会「正信偈の教え」に聞く  
法話 岸本住職
- 6月23日 評議員会総会(37名参加)
- 6月25日 仏教青年会 映画会
- 6月26日 教行信証「信巻」に聞く(第89回)  
講師 宗正元 師
- 6月27日・28日 宗祖忌
- 6月30日 城東ブロック会総会・聞法会  
(人形町・香港美食園 参加者25名)
- 7月3日 企画委員会
- 7月3日・4日 本山・式務講習会  
(住職 蓮井 仲井 参加)
- 7月5日 教区会議  
(新横浜グレイスホテル 住職 坊守参加)
- 7月6日 混声合唱団「エコー」練習  
同行会「正信偈の教え」に聞く  
法話 山崎 哲
- 7月7日 仲井真裕君・木村由香梨さん結婚式(本堂)
- 7月7日・8日 中興忌
- 7月13日～16日 孟蘭盆会
- 7月20日・21日 仏教青年会研修旅行  
(伊香保温泉方面 参加者12名)

## 聞法会だより 仏教青年会 研修旅行

7月20～21日  
にかけて総勢12名  
のもと、仏教青年会  
研修旅行を開催しま  
した。



今回は伊香保温泉を訪れ、途中水澤観世音(水澤寺)を参拝しました。水澤寺は1300年以上続くお寺で、境内にはおみくじやお守りだけでなく地元で採れた野菜も店頭に並んでいました。歴史ある建造物を前に参加者の皆様と記念写真を撮る



など、楽しい時間を過ごさせていただきました。

(高橋 淳 記)

## えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。  
ご芳名の掲載をもってお礼とさせていただきます。

横浜市 酒井 義光 様

# 掲示板

平成25年 8月

3日(土)

13日(火)～16日(金)

25日(日)

31日(土)

午後3時半

午後5時半

午後3時半

混声合唱団「エコー」練習

孟蘭盆会

青年会主催バーベキュー大会

混声合唱団「エコー」練習

## 夏の思い出にバーベキュー！

(青年会主催バーベキュー大会のお知らせ)

去年は焼肉や焼きそば、ビールにジュースはもちろん、かき氷にじゃんけん大会、花火に門徒さんからのマグロやホタテの寄付など、ご家族連れの皆さんにも楽しんでもらいました。今年も開催します。お友達などと一緒に、ぜひお越しください。



なお、皆様からいただいた参加費は東日本大震災の義捐金として福島県自治体に寄付する予定です。



● 8月25日(日) 17時半より開催(20時半終了予定)

● 参加費：大人2,000円、小人1,000円(小学生未満無料)

## 本堂で一緒に お勤めしませんか

西徳寺では毎日、午前8時から<sup>じんちようほうよう</sup>晨朝法要(朝のお勤め)が行われております。お盆やお彼岸(春・秋)は開始時間を午前7時30分に変更いたします。現在は少数ですが、熱心にお参りされる方がおられ、一緒にお勤めをされています。お時間のある方はぜひ参加してみませんか。

尚、**晨朝には華香所職員も出勤いたしますので、その間は営業していません**(お勤めの時間は約30分です)。どうかご理解いただきますよう、よろしくお願い致します。

(主任 木村 記)

## 月決めご存じですか！

住み慣れた東京の地からお仕事の都合などでお住まいが遠方に移られたり、年齢や健康状態のこともあり、ご命日にお寺へ足を運ぶことがままならないなど、諸事情によってお墓参りが困難になられたご門徒様がられるかと思います。

そんなとき、西徳寺には「**月決め**」という制度がございます。**ご希望の命日にお花・お線香・しきみなどをお供えし、墓石の清掃もお引き受けいたします。**代金はご持参いただくか、現金書留または振り込みでも結構です。

お彼岸・お盆・祥月命日など1回のみから、年間契約までお申し込みいただけます。金額は線香1対200円、色花1対1500円、しきみ1対500円となります。尚、年末年始は色花のみ2000円となります。

ご不明な点については、お電話にて寺務所までお尋ね下さい。

電話 03-3875-3351

(木村 専正 記)

## 編集後記

7月7日、法務員の仲井真裕君が西徳寺本堂におきまして「<sup>おごそ</sup>仏前結婚式」を挙げられました。厳かな雰囲気の中、岸本住職の司婚のもとめでたく婚儀が整い、お二人は新たな人生を歩み始められました。

「司婚の言葉」の中で、これからの人生がお念仏のみ教えを依りどころとし、自分を支えてくださる人々に導かれることの尊さが語られていました。かつて自分もいただいた言葉だったことを思いだし、感慨深く拝聴させていただきました。

(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：

**HP** <http://saitokuji.tobihiro.jp/>

ゆうちょ銀行お振り込み口座 00120-0-80670 名義 西徳寺

※「えこお」に対してのご意見・ご感想をお寄せ下さい。  
(メールでも結構です)

✉ [saitokuji@ce.wakwak.com](mailto:saitokuji@ce.wakwak.com)